

弥生土器様式の空間概念

濱田 延 充

1. はじめに(弥生土器研究の現状)

畿内地域における弥生土器の研究は、1990年代に入って新たな研究領域に入ったと考えられる。これまでに解明に時間と労力が費やされた編年あるいは地域色の現象面での基本的認識は、研究者の共通理念として定着しつつあり、今後大きな変更を伴うことは無いと思われる。こうした現状を踏まえ、現象面の追求に満足できない研究者からは、さらに一歩進んで現象の内実を明らかにしようとする試みが目に付くようになってきた。こうした試みは畿内弥生社会の解明に直結するもので、従来の時間・空間区分の道具としての弥生土器研究の新たな展開として評価されよう。

編年研究では、畿内各地域ごとに編年案が提示されており、各型式の組列による時間的変遷は概ね確立されたといえよう。今後は、各地域の時間枠の併行関係の整理や、時期区分の画期の設定方法といった方向で研究が深化されるものと思われる。後者については、研究者各自の様式観さらには歴史観と大きく関わる問題であり、これらを解決して研究者間の共通認識とするには、かなりの時間と労力を要するものと思われる。問題の解決には議論の活性化をはかる必要があり、このためには画期の設定の説明と各時期(様式)の内容の提示が十分に行われなければならない。

一方、1970年代以降研究が進展した地域色の研究も、弥生時代中期を中心に旧国単位といった畿内地域内部での小地域の様相について、特定型式や属性レベルで解明されつつある。しかし、地域の領域や地域間の境界等の具体的問題は、未解決のまま残されている。

筆者は、かつて編年作業における弥生土器様式論の「型式」・「形式」・「様式」の概念について若干の整理を行った^(注3)。そこで、近年隆盛を極める弥生土器の地域色研究における方法上のいくつかの問題について検討を加え、同研究についての筆者の立場を明らかにすることを小論の目的としたい。特に、これまでの編年研究において中心的役割を果たしてきた弥生土器様式論と、地域色研究の関係についてを検討の主題として取りあげる。なお、小論では筆者の力量の及ぶ範囲として、畿内地域と呼ばれる近畿地方中心部を中心とした地域の研究について、主として検討を加えることをあらかじめお断りしておく。

2. これまでの地域色研究

畿内地域における弥生土器の地域色の存在を指摘したのは、佐原真である。佐原は、1960年代の資料の蓄積を背景に弥生時代中期の地域色に言及した。まず、畿内第Ⅱ様式において型式分類した甕形土器の遺跡間の出土比率の比較を行い、分布の中心地域の名称を与えた^(注4)。また、畿内第Ⅲ様式においては器種構成・調整技法・文様構成等によっておおむね旧国単位の領域での地域色が指摘できるとしたうえで、壺形土器における頸部突帯文と櫛描簾状文の両属性の地理的分布から、畿内地域を淀川流域の北部地域と大和川流域の南部地域に大別した^(注5)。畿内第Ⅳ様式には凹線文・外面ヘラ削り・タタキ目技法の普及により地域色は薄められ、畿内地域は一体化の傾向を示すという。この佐原の視点は、井藤暎子に受け継がれ、井藤は1970年代以降の資料の莫大な増加を背景に、近畿地方における弥生時代中期土器の地域色の認識の深化に努めた^(注6)。

都出比呂志は畿内第Ⅴ様式において、主として淀川水系の遺跡における甕形土器における受口口縁の近江型と「く」の字口縁でタタキ目をもつ畿内型の出土比率を検討し、佐原の指摘した地域色の存続を指摘した^(注7)。その後、中期土器の地域色についても、小林行雄の地域的様式差を再評価したうえで、具体的作業として櫛描文様各種の使用頻度によって地域差を導きだした^(注8)。都出は地域色を示す諸属性の変化は一様でなく、境界での変化が漸移的になるため具体的境界の設定は困難としている。また、都出は、民族例を援用して弥生土器の製作を女性の仕事と仮定した上で、こうした地域色の社会的背景について言及している^(注9)。

深澤芳樹は、広口壺の文様構成と甕の仕上げ(調整)の地域性の検討を前期～後期で行った^(注10)。深澤は、両者の地域色の分布やその時間的変遷に違いが認められることを認識し、その違いを各属性のもつ内容の違いに起因すると考えた。さらに、土器製作技術の面から文様は表層的要素、仕上げは基層的要素と規定した上で、その技法の伝搬について前者は交易等による土器製作者の移動を伴わないもの、後者は土器製作者自身の移動によるものと理解した。

溝口孝司は、中部瀬戸内～近畿地方の弥生中期土器について複数の型式および文様属性の地理的分布を分析した^(注11)。さらに、その結果についてイアン・ホッダーの業績を引用して、境界の設定が不可能なもの(I)と明確な境界線の設定が可能なもの(II)に整理した。溝口は、近畿・中部瀬戸内地方間と畿内地域および畿内周辺部に境界線の設定を行ったが、畿内地域内部においては各属性の地理的分布はI類型となり、その設定は困難とする。

以上の研究については、特定の形式や属性を抽出して地域間の比較を行うといったスタイルをとるものが多い。その結果、土器様式としては「畿内」様式を堅持する形で地域を細分せず、型式・属性といった下位のレベルで地域色を認識するという研究の方向性をも

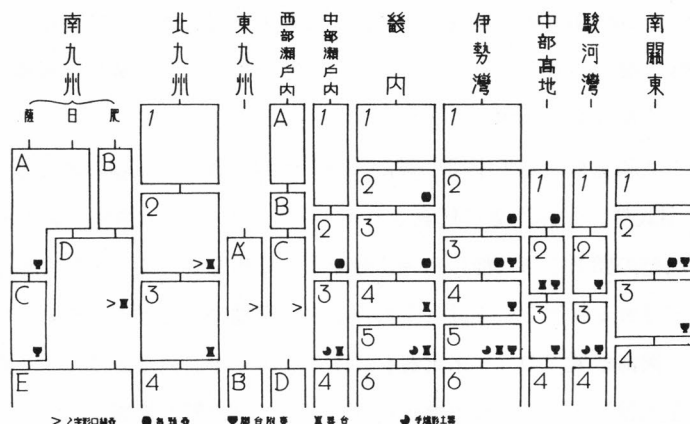
っている。一方、1980年以降、畿内各地域ごとに弥生土器の研究が進められるようになり、地域ごとの編年も提示されるようになった。こうした中で、各地域の土器様式の構造を見つめ直そうという動きも表面化してきた。^(注12)

松本洋明は、大和盆地の弥生中期土器について前期遠賀川式土器の系譜をもつヘラミガキ調整を施す型式群、大和型甕に代表される外面を荒いハケメ調整を施す型式群、凹線文・ヨコナデ調整の顕著な型式群の三者に分類し、整理を行った。^(注13)凹線文出現前の段階では前二者で構成される状態を松本は「土器作りの二重構造」と呼ぶ。松本の視点には、石黒立人が行った東海地域での「～系土器」による整理^(注14)や中河内平野部での生駒西麓産土器と非生駒西麓産土器(在地産土器)の混在状況についての理解^(注15)が影響を与えているのみでなく、桑原久男の弥生中期土器様式の整理^(注16)と関連をもつものである。松本は先に畿内第Ⅲ様式における壺・甕の地域色の検討を行っているが、そこでも畿内第Ⅱ様式系と瀬戸内系の型式に分類して整理を行っている。^(注17)松本の結論から派生する諸問題については、この場では特に検討を加えないが、それらが大和弥生社会を考える上で重要な意味をもつことは明白であろう。^(注18)

松本の研究は、弥生土器様式の構造が畿内地域においても単純でないことをはからずも示した。その結果、これまでの特定の型式や属性の検討は、土器製作体系の一片を理解したにすぎないのではないかという問題が露呈することとなった。したがって、こうしたレベルでの地域色の指摘は現象面での事実だとしても、それをもって各地域の土器製作技術や地域社会の内容等を論ずることは、現象の過大視の可能性を多分に含んだものになってしまう。弥生土器研究から、こうした問題に肉薄するためには、より高次元での地域色研究方法の展開が必要であると考えられる。

3. 弥生土器様式論と土器の地域色

都出が再評価したように、小林行雄の様式概念には時間概念とともに地域概念を含むものであった。^(注19)小林は実際の作業として、『弥生式土器聚成図録』で、様式によって北九州・中部瀬戸内・畿内・伊勢湾といったマクロな地域区分を行っている。^(注20)ただし、ここでは様式による時期区分が主題となったため、小林は地域区分に関して多くを語らなかった。^(注21)この様式によって時期区分を行うという方針はそのまま『弥生式土器集成』にも受け継がれ、同書においても編年の記述の単位空間としての各地域の設定については『弥生式土器聚成図録』を踏襲するのみで、具体的な記述はされていない。その後の地域色の研究の動向については前章で整理を行ったが、様式としての地域色の検討はほとんど行われず、様式研究＝編年研究で研究が進められた結果、現状では編年研究と地域色研究が別々の研究



第1図 小林行雄の弥生土器様式構造図(注21文献)

領域として扱われている感さえある。

しかし、様式が時間的・空間的に限定された型式群として表現される分類概念であり、この概念を利用して編年研究における土器製作技術の変遷、土器使用による生活の実態が語られる以上、地域色研究も編年研究同様に様式論的アプローチがされてしかるべきであろう。この際に使用する様式概念は、後述するように編年研究の際に使用されているものとは若干異なったものとなると考えられる。そこで、編年研究において語られてきた様式を「時間的様式」と呼び、これに対置する意味で地域色研究において使用する様式を「空間的様式」と呼ぶこととする^(注24)。

様式概念は分類概念の一種であり、個々の様式単位は分類単位である。従って小林が述べたように「^(注25) 斉一性概念」と「個別原理」として様式は存在する。すなわち、空間的様式の場合も、時間的様式の場合と同様に、様式を設定した空間内において型式群として表現される土器総体の斉一性概念が認められ、さらにその空間の外側に位置する様式との比較において個別原理が認められれば、空間的様式の設定は可能となる。逆にこれらが認められない場合には、空間的様式として成立できないことになる。畿内地域の現状に即してこの問題を考えると、遠賀川土器様式の中で地域色の発現が明瞭でない第I様式(特に古相)と、地域色が崩壊し畿内地域全体で土器が等質化する第V様式では、さらなる空間的小様式の設定は困難と考えられる。さらに、後者では周辺の琵琶湖地域・丹波地域・吉備地域と様式区分できるが、前者では特に古相において中部瀬戸内など以西の地域との様式区分は困難となろう。

次に、空間的様式における「型式」・「形式」・「様式」の概念規定について若干の整理を行っておきたい。「型式」は、先に時間的様式を整理した際^(注26)に定義したのと同じで「分類の最小単位として認定できるもの」であり、時間的・空間的・機能的に限定された

概念として表現されている。また、「様式」についても「時間・空間によって限定された型式群」として理解できる。

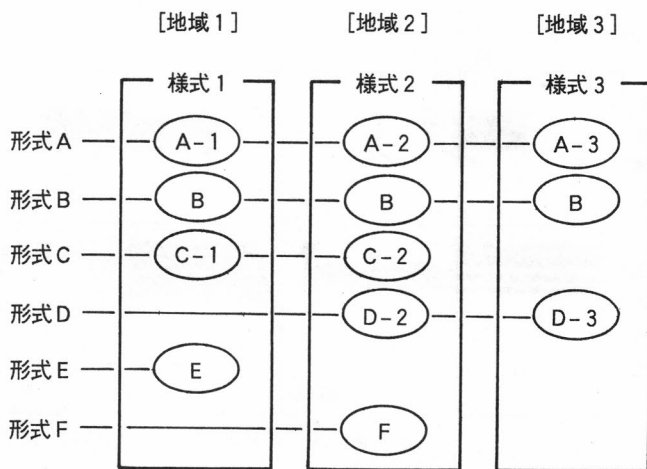
ここで、問題となるのは、空間的様式での「形式」概念である。時間的様式を整理した際には、形式については「型式設定の際にとりあげた属性のうち、時間的変化を有

するものを取り除いた属性を共有する、いくつかの型式の集合」として考えた。空間的様式においても同様に、「型式のもつ属性の中から、地域的変化を有するものを取り除いた属性を共有する型式群」として定義したい。当然のごとく、その内容は時間的様式での形式と異なる。佐原真をはじめ井藤暁子・國分政子・若林邦彦らが型式分類を行った畿内第Ⅱ様式の甕や、溝口孝司が地域間の比較を行った中期の広口壺・屈曲あるいは段状の口縁をもつ鉢(鉢B)などは、この形式として認定できるものである。さらに、森岡秀人が検討を行った摂津・播磨・紀伊地域の第Ⅲ様式優勢壺も、空間的様式における形式概念を概ね満たすものであろう。型式・形式・様式の設定は作業者の自由であるが、こうした設定を行う際に基準を明確

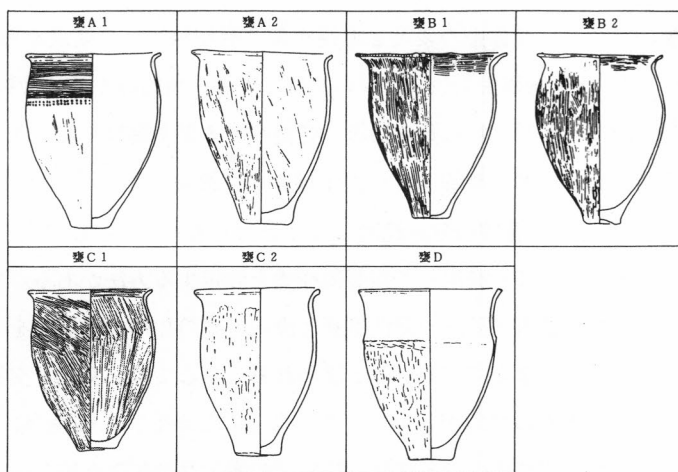
にし、その基準で誰が作業しても同じ結果が導かれるようにすべきことを繰り返しておく。

4. 製作様式と消費様式





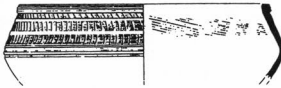
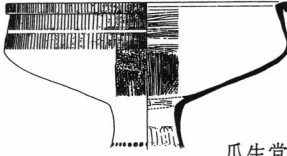
弥生土器の様式概念について、筆者は先に時間的様式を整



第2図 空間的様式構造概念図(○：型式)



第3図 近畿地方中期前葉甕形土器の諸型式(注1 若林文献より)

	摂津	大和	河内
第Ⅲ様式	 田能	 四分	 亀井
第Ⅳ様式	 勝部	 四分	 瓜生堂

第4図 鉢B形式の諸型式(注11文献より)

理した際に様式には二つの側面をもつと考^(注30)えた。すなわち、小林行雄が弥生土器研究の目的とした「製作に関するもの」と「使用に関するもの」の二者が、様式においては「型式分類」と「一括資料」で表現されると理解した。様式のもつこの二つの側面は「製作様式」と「消費(使用)様式」と呼ぶことができよう。時間的様式同様に空間的様式を考える場合でも、様式のもつ二側面の理解は重要である。

この考察の中で、搬入品の扱いについて二つの様式でその扱いが異なることを明らかにしたが、空間的様式を考える上でも同様な問題の存在を指摘することができる。各地域における製作様式の解明を目的とした場合、搬入品を全て除外して様式を考える方法が有効である^(注32)。筆者は「生駒西麓地域」において中期中葉から後葉の編年の問題^(注33)を考えた際に、同地域で検出された一括資料に含まれる搬入土器を考察の対象から除外した。また、他地域で出土している同地域産と認定される土器については、逆に考察の対象とした。これは、製作技術や生産体系の変遷を重視する「製作様式」の観点から編年を考えたためである。その際、「生駒西麓地域」については、雲母・角閃石を多く含む特徴的な胎土をもち、「生駒西麓型」と呼ばれる垂下口縁・外面ヘラミガキ調整・簾状文主体の文様構成等の属性に代表される土器を製作していた地域として設定したもので、この種の土器を高率(70%以上)で出土する遺跡の分布範囲として空間的領域を設定した^(注34)。

一方、搬入品を利用して空間的様式を設定する方法がある。事例は多くないが、第2章で紹介した都出比呂志の近江型甕と畿内型甕の比率で地域差を求めようとした考^(注35)察は、搬入品も含めて考えているものと思われる。ここでは、交流・交易といった消費様式の視点^(注35)に立った土器の使用が考察の対象となる。しかし、この場合、斉一性原理という点から、設定した単位地域内の各集落(遺跡)での搬入品の比率が等しいという前提が成立しなければならない。森岡秀人が西摂地域で明らかにしたように集落の性格によって搬入土器の質^(注36)

量に違いが認められるのであれば、こうした議論の成立は困難となろう。

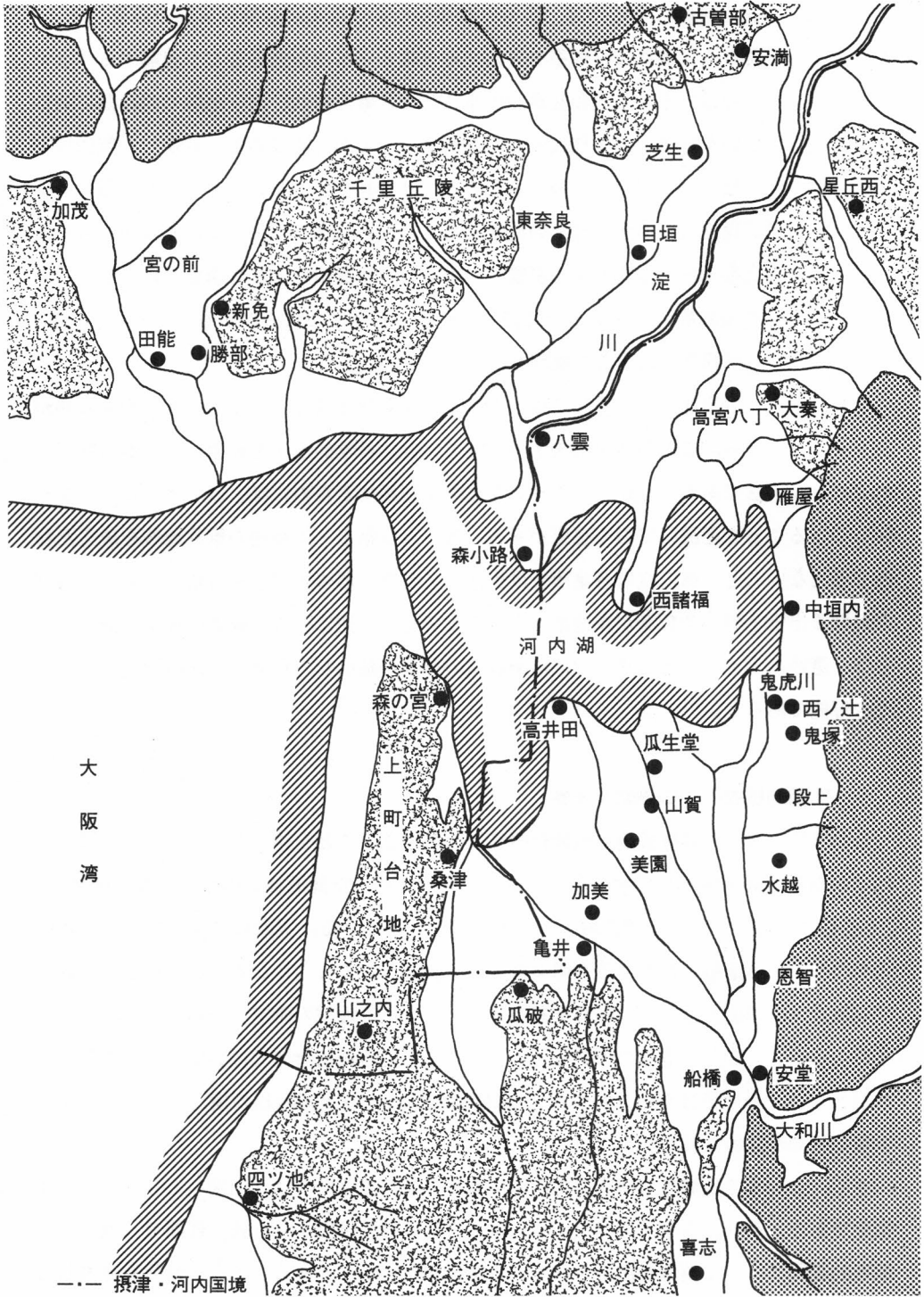
さらに、問題を複雑にするのは、松本の指摘したような大和盆地の実態の評価である。^(注37) 第2章で述べたように製作技術体系を異にすると考えられる型式群をどう理解するべきであろうか。これらはいずれも大和盆地で生産されたと考えられ、同一地域で同時期に製作された型式群という意味で同一様式として理解することが可能である。しかし、製作技術の視点で考えれば、各土器群を一つにまとめることは好ましくない。こうした土器群の整理については石黒立人の濃尾平野での成果がある。^(注38) この地域では弥生文化成立期から在地性の強い条痕文系土器と以西地域の影響下で成立した遠賀川式土器で構成されており、中期以降も複数の型式群による構造を維持している。石黒はこれらの土器を「～系土器群」という様式の下部構造を設定して整理をおこなっている。

なお、搬入・搬出品を考える際には、どの土器が在地で製作されたものと認定するかが重要な問題となる。この問題を解決するうえで、自然科学的手法を利用した土器の胎土分析は有効な手法である。しかし、こうした成果を利用するためには、以下の二点の仮定を伴っていることを認識しておく必要がある。第一点は粘土・混和剤の単位地域を越えた移動を考えないこと、第二点は各集落では生活に必要な土器の大部分を自給しており各遺跡における出土土器の多数派が在地産とすることである。逆に、この後者の仮定を認めるならば、遺跡出土土器の各形式における多数派の型式を抽出して在地産土器の認定を行うことも可能であろう。

5. 空間的様式のもつ領域と境界

これまで、弥生土器様式論を地域色研究に活用できることを述べたが、この「地域」とはいかなる空間領域として示されているのであろうか。空間的様式の単位となる地域は、「土器様式を同じくする空間領域」と定義することができる。実際の地図上には、土器様式を同じくする遺跡の分布する空間領域として表現されることとなる。この単位地域設定の手続きは、理論上は「(空間的)土器様式の設定→単位地域の確定」の順に行われなくてはならない。しかし、実際の作業として、これまでの地域色研究では必ずしも上記の手続きがとられたわけではない。むしろ、「単位地域の設定→土器様相の検討」といった逆の手順で研究が進められた。

さて、これまで地域色の研究の中で単位地域を担ってきたのは「旧国」と呼ばれる空間領域である。これは佐原が述べたように現在の都道府県単位よりも狭い範囲で、地形など地理的要因によって領域が設定されている場合が多いからである。佐原が研究を発表した当時では資料的にも十分では無く、土器資料によって単位地域の領域を提示することは困



第5図 河内湖周辺の弥生時代遺跡位置図(『続大阪平野の発達史』梶山・市原1985より作成)

難であったといえよう。それでも、佐原は河内地域の中で淀川流域の北河内地域(主として枚方丘陵)を、土器の様相より摂津・山城地域と同じ畿内北部地域に含めている。佐原の設定した旧国領域は、設定当初よりいくつかの問題を含んでいたにもかかわらず、その領域の検討はほとんど行われないうまま現在に至っている。^(注40)

この旧国の境界が必ずしも地理的な要因によって設定されていないことは、畿内地域では摂津国が好例である。摂津国は大阪府北部、兵庫県東南部のほか、現在大阪市域となっている上町台地と淀川下流域の一部を領域としている。これは摂津国が本来摂津職で、難波津の管理を行う目的で設置されており、その領域・国境の設定に際しても政治的要因によるところが大きいためである。このため、大阪府北部(三島)・兵庫県東南部(西摂)などの地域と旧東成・西成・住吉の3郡の大阪市域は地理的にも区分されるべきで、弥生時代中期における同地域の森ノ宮・森小路・山之内・桑津の各遺跡の土器様相もいわゆる摂津地域の中で理解することは困難といえよう。

こうしたことから、資料の蓄積が行われた現在は、地域の設定はやはり土器によって行われなくてはならないであろう。近年の各地域での編年の成果を集大成した労作の『弥生土器の様式と編年』近畿編においても編者の寺沢薫が「様式の地域性とは時間によって動的なものと述べながら、編集上の都合から旧国単位での執筆をお願いしている。」と苦言を述べたように、^(注41)基本的には佐原の空間概念を踏襲している。もっともこの中で森田克行は摂津第Ⅲ・Ⅳ様式において千里丘陵以東の「北摂」地域と以西の「西摂」地域に区分している。^(注42)

さて、土器によって区分された地域は、その名称についても適切なものが与えられなくてはならない。現在、より細かな地域設定の研究が行われながら、適切な地域の名称が与えられず混乱を与えているケースもある。第Ⅲ・Ⅳ様式の櫛描簾状文で飾られる「河内」の土器と呼ばれた一群の土器は、淀川下流域の「北河内」・石川流域の「南河内」を除いた旧大和川下流域の中河内地域の土器と理解されてきたし、実際にはこの中河内地域でも山麓部(生駒山地西麓部)で製作された土器であることが明らかになっている。^(注43)その結果、瓜生堂・亀井等の旧大和川下流域の中河内平野部の各遺跡で製作された土器は、『瓜生堂遺跡Ⅲ』で「他地方」の土器とされた、従来の「河内」の土器とは大きく異なるものの中で考えなくてはならなくなっている。^(注44)一方で、現在でも櫛描簾状文は広く「河内」地域の属性として理解されており、上記の現状と齟齬をきたしている。こうした混乱を避けるためにも出土土器によって設定された単位領域は、地理的な名称等を用いて適切な地域名が与えられるべきである。^(注45)

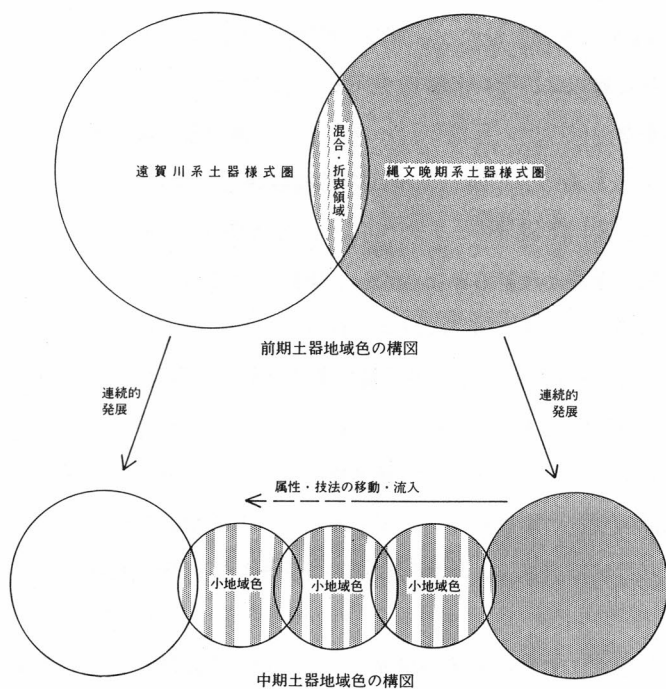
さて、次に弥生土器の地域色研究における地域の境界は、どういった意味をもつものか明らかにしたい。実際の作業として、境界と呼ぶべきラインを実際の地図上に落とすこと

ができるのであろうか。先に紹介した都出比呂志は、属性の変異が地域の周辺部で漸移的となり境界の設定は困難としている^(注46)。一方、溝口孝司は、分布のパターンによって境界を設定することが可能な場合があると考えている^(注47)。

若林邦彦は、第Ⅱ様式の甕形土器の地域色について、従来から指摘されていた体部外面の調整技法に加え、製作時の粘土紐の接合技法によって整理を行った^(注48)。第Ⅱ様式の甕は、外傾接合を行う遠賀川式土器と内傾接合を行う条痕文系土器に起源をもつ型式群として整理され、それぞれの地域色を発現する型式は、両者からの距離に比例する形で原型との類似性が薄められることを指摘した。若林は、各型式の分布状況から、第Ⅱ様式における甕の地域色は明瞭な境界をもたず、先に述べた両者間の「連鎖的変移帯の漸移相として顕在化している」と考えている。この結論は、各型式の甕の分布が溝口の定義したⅠ類として解釈することも可能であろう。

空間区分の作業を行う上で、異なる二者の領域の関係については次の三通りが想定される。1. 両者の領域が全く接しない場合、2. 境界部分で他の領域と僅かに重なりをもつ場合、3. 他の領域と大きく重なりをもつ場合となる。1・2は、溝口のⅡ類、3はⅠ類として理解できる。ただし、重なり部分の評価でⅠ類とⅡ類をどう区分するのかに問題が残る。さらに、溝口のⅡ類のように他の領域の中央部まで食い込むようなものを、地域

性を有するものとして認定するのかということも検討課題である。また、領域の重なり部分の評価についても、1. 領域の境界・周辺・緩衝部分としてどちらの領域にも含めず無視して扱う、2. どちらかの領域に含めて考える、3. 両方の領域に含めて考える、4. 新たな領域として評価するの四者を想定することができよう。



第6図 土器地域色顕在化の図式(注1若林文献より)

5. おわりに

弥生土器の地域色の研究は、編年研究に比べ歴史が浅く、その方法についての議論もこれまで明確な形で行われることも少なかった。一方で、編年研究においては小林行雄の様式概念という優れた土器分類概念があり、この様式についての議論についても活発に行われてきた。小論で述べたように、地域色研究においてもこの様式概念を利用して研究を進めることは有用であると考え。地域色研究と編年研究は土器研究における両輪であり、両者は有機的な関係をもつものである。こうしたことから、同じ概念装置を利用して研究を進めることは、総合的な土器研究を進める上でも有効な方法となろう。

もちろん、こうした問題の解決のために、様式を構成する個々の型式や属性の詳細な検討が不可欠なことは、論を待たない事実である。弥生社会の本質に切り込むための方法として、これまでの成果を踏まえた上で、空間の様式というマクロな視点での土器論の展開も必要な時期にきたと考えるのである。^(注49)小林行雄の様式概念については、その理解・評価をめぐって様々な論考が発表されているが、様式を学史の中の過去の産物とするのではなく、現代的な意味を付加して活用をはかっていくことこそ、様式に対する私達のとるべき態度と考える。

小論では、空間の様式の設定にあたって、分類概念や空間分類と境界の評価等について若干の検討を行ったが、種々の問題は未解決のまま積み残している。こうした点については今後の課題とし、実際の作業を行っていく中でその都度方法論の提示を行っていくこととしたい。

小論は、大野薫・安村俊史・三好孝一氏との雑談や、桑原久男・菅栄太郎・若林邦彦・吉田広・大庭重信氏をはじめ京都弥生文化談話会の皆さんとの研究会やその後の懇親会(酒宴)等のなかでの着想をまとめたものである。日頃勉強する機会と意欲を与えていただいている上記の皆さんと、センター在職わずか1年、センターを離れてすでに5年になる私に発表の機会を与えていただいた調査研究センター土橋誠氏のご厚情に感謝の意を表したい。なお、小論を昨春めでたくご結婚された三好孝一・真紀夫妻、若林邦彦・村田幸子夫妻、松井忠春・順子夫妻にお祝いの気持ちを込めて捧げることを許されたい。

(はまだ・のぶみつ=寝屋川市教育委員会)

注1 國分政子「弥生土器地域論—畿内第Ⅱ様式の系譜をめぐって—」『滋賀考古』第2号 滋賀考古学研究会 1989

若林邦彦「弥生土器地域色顕在化の構図」『弥生文化博物館研究報告』第2集 1993

- 注2 寺沢 薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ・Ⅱ 木耳社 1989・1990
(財)大阪文化財センター『第11回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』—各地の弥生中期土器の編年— 1993
後者については、当日の研究会の内容を司会を務めた若林邦彦がまとめている。
若林邦彦「第11回近畿地方埋蔵文化財研究会をおえて」『大阪文化財研究』第6号 (財)大阪文化財センター 1994
- 注3 濱田延充「編年作業における弥生土器様式の諸問題」『京都府埋蔵文化財情報』第31号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989
- 注4 佐原 真「畿内地方」『弥生式土器集成』本編Ⅱ 1968
- 注5 佐原 真「大和川と淀川」『古代の日本』5 近畿 角川書店 1970
- 注6 井藤暁子「入門講座・弥生土器—近畿」2・4 『考古学ジャーナル』202・207 1982(佐原真編『弥生土器』Ⅰ 1983に再録)
- 注7 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻4号 1974
- 注8 都出比呂志「弥生土器における地域色の性格」『信濃』第35巻4号 1984
- 注9 都出比呂志「原始土器と女性」『日本女性史』1 東京大学出版会 1982
- 注10 深澤芳樹「弥生時代の近畿」『岩波講座 日本考古学』5 文化と地域性 1986
- 注11 溝口孝司「弥生土器における地域色—弥生時代中期の中部瀬戸内・近畿を素材として」『古文化談叢』17 1987
- 注12 中河内平野部の土器様式の構造については、以下の研究がある。
畑 暢子「いわゆる亀井産土器の検討」『亀井・城山』(財)大阪文化財センター 1980
広瀬和雄「弥生土器の編年と二、三の問題」『亀井(その2)』(財)大阪文化財センター 1986
若林邦彦「弥生土器地域色に関する一考察」『考古学与生活文化』同志社考古学シリーズV 1992
桑原久男「河内平野における中期弥生土器の“様式構造”」『唐古 藤田三郎・紅さん結婚記念論文集』 1992
國分政子「河内地方弥生時代中期土器の検討」『長岡京古文化論叢Ⅱ』 1992
- 注13 松本洋明「大和における弥生中期土器の展開」『第11回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』 1993
- 注14 松本洋明「弥生土器・考察V—大和型甕と土器作り集団(後編)—」『みずほ』第12号 1994
- 注15 石黒立人「弥生中期土器にみる複数の<系>」『考古学フォーラム』創刊号 1990
- 注16 若林邦彦・桑原久男 注12文献
- 注17 桑原久男「畿内弥生土器の推移と画期」『史林』第72巻1号 1989
- 注18 松本洋明「弥生時代における畿内の地域性について」『花園史學』第8号 1987
- 注19 注8文献
- 注20 小林行雄「先史考古学に於ける様式問題」『考古学』第4巻8号 1932
- 注21 森本六爾・小林行雄編『弥生式土器聚成図録』正編 1939
- 注22 「後説」において、小林行雄が地域区分の大要について若干ふれている。なお、『弥生式土器聚成図録』における小林の「地域の様式」の理解については、山本雅和がまとめている。
山本雅和「“弥生式土器聚成図録”‘解説編’の記述」『考古学史研究』第3号 京都木曜クラ

- ブ 1994
- 注23 小林行雄・杉原莊介編『弥生式土器集成』本編Ⅰ・Ⅱ 1968
- 注24 小林行雄の「時代様式」・「地域様式」にそれぞれ対応する。
小林行雄 注20文献
- 注25 小林行雄「様式」『弥生式土器聚成図録』正編 1939
- 注26 注2文献
- 注27 佐原 真 注3文献
井藤暁子 注5文献
國分政子 注1文献
若林邦彦 注1文献
- 注28 注11文献
- 注29 森岡秀人「突帯文土器地域色に関する若干の検討」『末永先生米寿記念献呈論文集』乾 1985
- 注30 注2文献
本村充保も、筆者同様に小林様式論のもつ二つの様式について指摘している。
本村充保「小林行雄の二つの<様式>」『考古学史研究』第4号 1995
- 注31 注20文献
- 注32 都出比呂志 注8文献
- 注33 濱田延充「生駒西麓第三・Ⅳ様式の編年」『弥生文化博物館研究報告』第2集 1993
なお、生駒西麓地域の土器様式については、筆者および國分政子の理解に対する文殊省三の「縄文〜鎌倉時代の同様な胎土をもつ土器をすべて生駒西麓様式とするのか」という批判がある。筆者は「胎土を一つの基準として様式を認定」したのではなく、製作様式の観点から従来の「河内地域」を細分した「生駒西麓地域」という空間の様式の領域を設定し、その編年の策定を行った。その上で、特徴的な胎土を利用して、同地域で製作された土器を選別したのである。筆者は、「生駒西麓様式」が成立するのは、その個性原理が認識できる中期中葉〜後葉のみと考えている。なお、非生駒西麓型の生駒西麓産土器については生駒西麓地域で製作された土器との観点から様式に含めて考えているが、極めて少数派で生駒西麓地域の中で型式組列を提示することも困難であることから、搬入品に近い扱いを行い、諸型式の積極的な検討を行うことを避けた。また、生駒西麓産土器のみからなる一括資料は無いという指摘については、これまで開発等の問題で、中河内平野部と比較して生駒西麓地域での弥生中期集落の調査・報告例が少なかった事情に起因するもので、将来的に西ノ辻・鬼塚・段上・水越・恩智等の当地域の遺跡で生駒西麓産土器を主体(8割以上)とする良好な一括資料が充実するであろうことを付け加えておく。
- 文殊省三「弥生土器研究の可能性について」『大阪市立博物館研究紀要』第27冊 1995
- 注34 濱田延充「弥生時代中期におけるいわゆる生駒西麓産土器の製作地」『京都府埋蔵文化財情報』第35号 1990
- 注35 注7文献
- 注36 森岡秀人「東六甲の高地性集落」(中)『古代学研究』第97号 1982

その後、都出比呂志も乙訓地域の森本・中海道・今里の3遺跡の第V様式の近江型と畿内型の甕の出土比率の違いを、集落ごとの他地域との交渉の程度の差と理解した。

都出比呂志「乙訓弥生社会研究の一視点」『長岡京古文化論叢』 1986

注37 注13文献

注38 注15文献

注39 佐原 真 注4文献

注40 旧国単位より狭い単位地域の提示を行った先駆的研究に次のものがある。

都出比呂志「ムラとムラとの交流」『図説日本文化の歴史』1 小学館 1979

注41 寺沢 薫「様式と編年のありかた」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社 1989

また、森岡秀人も、同様な意味での反省を行っている。

森岡秀人「弥生土器編年研究の諸問題」『第11回近畿地方埋蔵文化財研究会資料』 1994

注42 森田克行「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 木耳社 1990

注43 佐原 真「生駒西麓の土器」『東山遺跡』大阪府教育委員会 1980

井藤暁子「畿内の櫛描文土器」『弥生文化の研究』4 弥生土器Ⅱ 1987

三好孝一「生駒西麓型土器についての一視点」『花園史學』第8号 1987

濱田延充 注34文献

注44 曾我恭子「弥生土器」『瓜生堂遺跡Ⅲ』 瓜生堂遺跡調査会 1981

注45 石黒立人は、従来の「近江型(系)」土器の地理的分布の検討から、地域名称の改称の提言を行っている。また、國分政子・若林邦彦は畿内第Ⅱ様式の甕形土器の検討を行う際に、各型式の名称から旧国の地域名を取り外している。

石黒立人「鈴鹿・信楽山地周辺の土器—イメージとしての山—」『古代文化』第44巻8号 1992

國分政子・若林邦彦 注1文献

注46 注8文献

注47 注11文献

注48 注1若林文献

注49 若林邦彦は、先に紹介したように第Ⅱ様式の甕形土器の地域色の検討を行っているほか、櫛描文の発生についての考察を行っており、氏の今後の研究の展開が期待される。

若林邦彦「弥生土器櫛描文様に関する覚書」『大阪文化財研究』20周年記念増刊号 1992